9

べりーらんど萩田

環境制御装置導入によるブランドイチゴ『しずかちゃん』の生産性の向上

◆具体的な事業内容

県内有数のイチゴ生産者である同園は、最新の養液栽培システムや環境制御装置を導入し、収量増加、品質向上を目指した。長年の蓄積による栽培ノウハウと各種データを組合せ、次世代農業の実現を図っている。また、栽培技術の見える化により新規就農者の育成、雇用の創出、地域活性化を推進している。



会社概要

■ 社　　名：べりーらんど萩田
■ 代表者名：代表　萩田 知博
■ 所 在 地：〒436-0113
　　掛川市各和153-1
■ 取 材 地：同上(イチゴ農場)
■ 設立年月：昭和51年1月
■ 業　　種：農業
■ 資 本 金：ー
■ T　E　L：0537-24-2916
■ U　R　L：https://hagitaberry.com/

取り組みの経緯



イチゴ生産者の若きリーダー 萩田 祐太郎氏

県内有数のイチゴ農園
デジタル化の推進で生産性を向上

同農園は、掛川市で約 50 年前からイチゴを栽培しており、栽培面積は約 8,000㎡と日本の平均的イチゴ農家の約 4 倍の経営規模を誇っている。

同園では、全国的に人気の高いイチゴ品種「紅ほっぺ」や「きらぴ香」のほか、酸味が少なく、さわやかな甘みが特長の独自ブランドイチゴ「しずかちゃん」などを栽培。これまで、県内の品評会において度々表彰されるなど、高い評価を得ており、静岡県を代表するイチゴ生産者である。

イチゴは、本来、春が旬の作物だが、促成栽培の取り組みや品種改良により冬から初夏にかけて収穫されており、生食はもとより製菓の材料としても需要が拡大している。

しかし、昨今、賃金の上昇やハウス施設の建設費、冬場の暖房に使う重油代、肥料価格などの高騰により、利益率は低下しており、同園ではデジタル化や機械化を推進し、生産性をさらに高める必要性を感じていた。

また、需要が高い冬場の収量を増加させるためには、温度や湿度、生育に大きく影響する CO2 の濃度管理など、ハウス内の繊細な環境制御が求められることが課題である。

取り組みの内容



最新の環境制御装置で生産性を向上

ハウス内の環境を自動制御
コスト削減や作業環境の改善も

同園では、収量増加や品質向上を目指し、最新の養液栽培システムや自動カーテン、暖房設備、CO2 発生機、細霧装置、これらを複合的にコントロールする環境制御装置を導入した。

ハウス上部に設置したカーテンの開閉により、急激な温度上昇を抑える一方、冷え込む夜間の放熱を軽減し、暖房コストを抑えることができた。また、細霧装置により細かい霧を発生させ、気化熱を利用した冷房や、湿度コントロールが可能となった。

さらに、従来はハウス内全体に CO2 を充満させていたが、必要な量を、必要な場所にだけ供給する仕組みが構築され、CO2 施用の効率を大幅に改善できた。

需要の高い 10 月から 12 月にイチゴを出荷するためには、9 月上旬に苗を定植する必要がある。この時期のハウス内作業は、高温との闘いである。当システムは、ハウス内の温度を下げることが可能であり、イチゴの生育環境に良いばかりか、作業者の負担軽減による作業効率の改善にも大いに役立つこととなった。

結　　果



さわやかな甘みが特徴の「しずかちゃん」と特製ジェラート

栽培技術の見える化を実現
地域の可能性と未来志向の農園づくり

今回の事業は、同園が有する高度な栽培ノウハウと、蓄積した各種データの分析をもとにした、まさに『次世代農業』の具現化である。

ハウス内の気温、湿度、CO2 濃度、日射量などをモニタリングし、品質や収量に与える関係性を研究することで、栽培技術の見える化を図ることができた。

イチゴ栽培においては、長年の経験と勘に頼る栽培が主流で、技術の習得が新規就農の大きな障壁となっている。こうした中、栽培技術の見える化は、イチゴの生産性や品質を向上させる上で非常に重要なヒントとなり、既存の生産者はもとより、これからイチゴ生産を目指す者にとっても大きな手助けになるものと思われる。

若い感性と行動力で、次世代の農業に挑戦する同園の萩田祐太郎氏は「農業の魅力や可能性を伝え、地域の農業を牽引できるような、未来志向の農園作りをしていきたい」と夢を語った。同氏は働きながら製菓学校に通い、本格的なジェラートの製法を習得。開業した店舗は、県内外から多くのイチゴファンが訪れ、賑わいを見せている。